



秋の気配とともに——挑戦の季節を迎えて

夏休みが明け、校舎には再び子どもたちの賑やかな歓声と弾けるような笑顔が戻ってまいりました。連日の厳しい暑さも和らぎ、朝晩の爽やかな風に少しずつ秋の深まりを感じる今日この頃です。子どもたちはご家庭での思い出を胸に刻みつつも、気持ちを切り替えて学校生活の新しい目標へと元気に走り出しています。

これからの季節、学校では子どもたちが主役となる行事が目白押しとなります。自身の限界と向き合い、一步一步愚直に前へ足を届かせるマラソン大会への取り組み。そして、みんなで意見を出し合い、力を合わせて作品やステージを創り上げる学園祭などが代表です。校庭や体育館、教室からは、真剣な眼差しで意見を交わす声や、荒い息を吐きながらも必死に走る足音が聞こえてきます。



誰かに指示されたから動くのではなく「自分たちの手で最高の行事にしたい」「昨日の記録を少しでも更新したい」と、一人ひとりが自分の足で前へ進もうとする姿には、確かな成長と頼もしさを感じます。こうして試行錯誤しながら課題に挑む子どもたちの熱い眼差しを見ていると、ふと私の心に浮かんでくる、ひとつの有名な物語があります。（校長文章内の写真は、本校児童生徒とは関係のない写真を使用しております。）

ゆうべつ学園 校長 豊原 隆之

Sec 1 名作「さようならドラえもん」が教えてくれること

それが、国民的アニメ『ドラえもん』の映画『帰ってきたドラえもん』の原案でもある名作エピソード「さようならドラえもん」（原作：藤子・F・不二雄）です。

物語は、未来へ帰らなければならなくなったドラえもと、のび太の別れから始まります。いつも困ったことがあればドラえもんに泣きつき、ひみつ道具の力で解決してきたのび太。しかし、大好きなドラえもんを不安なく未来へ送り出すため、のび太はある大きな決意を固めます。それは、「誰の力も借りず、自分の力だけでジャイアンに勝つこと」でした。

夜の空き地でジャイアンに勝負を挑むのび太。当然、力では到底かないません。何度も殴られ、地面に叩きつけられ、ボロボロになっていきます。それでものび太は「僕だけの力で勝たないと、ドラえもんが安心して帰れないんだ！」と叫び、どれだけ倒されても相手にしがみつき、決して諦めませんでした。

最終的にジャイアンが根負けして「参った」と口にするまで立ち上がり続けたのび太の姿。それは、頼れる存在から離れ、自分の足で人生のスタートラインに立った「本当の自立」の瞬間でした。誰の力も借りず、自分の力だけで壁を乗り越えようとするあの強い意志こそが、人の心を動かし、その人自身を大きく成長させるのだと教えてくれます。



Sec 2 誰もが通った「初めて一人で立った」あの日の記憶

振り返ってみれば、私たち大人もかつては誰もが小さな「のび太」だったのではないのでしょうか。保護者の皆様も、子どもの頃に「誰も助けてくれない、自分でやるしかない」と、小さな胸を痛めながら勇気を振り絞った記憶はありませんか？

例えば、補助輪を外して初めて自転車のペダルを漕いだあの日のこと。後ろで支えてくれていると思っていた大人の手がいつの間にか離れていて、倒れそうになりながらも必死にハンドルを握りしめた瞬間のドキドキ感。一人で初めて近所のお店にお使いに行った時、レジの前で握りしめた硬貨が汗ばむほどの心細さ。あるいは、全校児童の前で発表するために壇上に上がった時の、足が震えるような緊張感——。

誰もが、背伸びをして、胸を痛めながら、「誰かに頼りたい」という弱音をぐっと飲み込んで一歩を踏み出してきました。そして、不器用ながらもその課題をやり遂げたとき、胸の中に灯った「自分だって一人でできたんだ」という誇らしげな温かい気持ち。それこそが、その後の人生を支えるかけがえのない自信の原点となったはずです。

今、学園祭の準備で行き詰まったり、マラソン大会で苦しくて足を止めそうになったりしている子どもたちの心の中にも、かつて私たちが経験したあの「葛藤」と「一歩を踏み出す勇気」が確かに芽生えようとしています。



Sec 3 ハラハラしながらも見守る、大人のあたたかな時間

子どもが必死になって勇気を振り絞り、壁に立ち向かっている姿を目にするとき、大人としてどう関わるべきか悩むことも少なくありません。

目の前で子どもが苦しんでいたたり、つまずいて涙を流していたりすると、ついつい手を差し伸べて助けてあげたくなるのが親心であり、私たち教職員の素直な気持ちでもあります。マラソン練習で息を切らして挫けそうになっている姿を見れば「無理しなくていいよ」と言ってあげたくなりますし、学園祭の準備で意見が衝突して困っている姿を見れば、すぐに解決策を教えてあげたくなります。

すぐに手を差し伸べてしまえば、その場はスムーズに解決するかもしれませんが、けれど、自分で考え、自分で痛みを引き受けて乗り越えた経験こそが、子どもの心に太く強い根を張ります。ハラハラと胸を痛めながらも「大丈夫、あなたならできる」と温かい視線を送り続ける時間。それこそが、子どもにとっても大人にとっても、尊く愛おしい成長のステップなのだと感じます。



Sec 4 小さな挑戦を、ともに喜び合える存在として

子どもたちの成長の道筋は、決してきれいな一直線ではありません。順調に進む日もあれば、立ち止まり、時には後ろに引き返したくなるような日もあります。

だからこそ、学校とご家庭がしっかりと手を取り合い、子どもたちの試行錯誤のプロセスを一番近くで支える「伴走者」でありたいと考えております。大切なのは、マラソン大会で何位になったか、学園祭の発表が完璧にできたかという「結果」だけではありません。途中で挫けそうになりながらも自分に打ち勝とうとしたこと、友達と意見をぶつけ合いながら最後まで自分の役割を果たそうとしたこと——その目に見えにくい「心の挑戦」にこそ、たくさんの拍手を送りたいものです。



「最後まで一人で走り切ったね」「自分たちの力でここまで創り上げたんだね」と、ご家庭と学校で温かい言葉を掛け合い、子どもたちが自分の足で一歩を踏み出す瞬間をともに喜び合っていきましょう。子どもたちがこれから迎える秋の挑戦を通して、またひとつ心も体もたくましく成長していけるよう、皆様とともにあたたかく見守り、応援してまいります。



8月26日のメニューは、
ハヤシライス



給食センターの皆さん
いつもありがとうございます！
ゆうべつ学園一同
AUGUST 26, 2026

